

学校教育目標

生きる力を育み，一人一人が輝く学校

研究主題

自分の思いや考えを深め，豊かに表現できる子

— 伝え合う力を育む学習の工夫 —

1 主題設定の理由

本校の児童は、賀茂川・高野川・糺ノ森などが近くにあり、自然環境に恵まれた中で育ってきている。また、落ち着いた地域環境、家庭環境の中でいろいろな文化に親しむ機会にも恵まれている子どもも多く、知識量も豊富な子が多い。しかし、知識を得たり、情報を集めたりすることはできるが、自分で考えたり、考えを広げていくことができにくい子がいる。また、正解か不正解かということだけにとらわれて、いろいろな考え方があることが認められない子や失敗を恐れて自分の考えを出そうとしないなどの傾向をもった子どもみられる。

そこで、自分の思いを出すことや考えを深めていくことで、共に活動する喜びを感じたり、連帯感が生まれることで自信をもって自分の考えを表したりできるようになって欲しいと考えている。これらのことから、経験したことや体験したことを、自分で考え、考えが広がったことを伝えていく力が大切だと思われるので、「**自分の思いや考えを深め，豊かに表現できる子**」という研究主題のもと、**国語科**を通して研究を進めることとした。

国語科の研究としては、今年度で3年目、昨年度までの研究で、自分の思いを話したり、書いたりできる児童が少しずつ増えてきている。しかし、まだ、自分の思いを伝え合う時のコミュニケーション力が十分ではなく、単語で話したりする子もあるので、語彙を増やし、場に応じた話し方ができる子になって欲しいと考えている。また、いろいろな考えを認め、話を聞ける子になってほしいと考え「**伝え合う力を育む学習の工夫**」というサブテーマを設定した。

話すことと聞くことは表裏一体のものであり、話すことの指導だけでなく、まず、聞くことの指導を大切にしていきたい。思いを共感的にうけとめ、じっくり聞いてくれる相手がいることで、のびのびと表現できるようになる。自分と違う考え方があることを知ることで、互いを認め合い、高め合える学級集団作りができていくと考えられる。それらのことにより、お互いの考えが深まっていき、**伝え合う力**も高まっていくと考える。

本研究の取組を通して、子どもたちの話す・聞く力を伸ばし、学校や社会生活を豊かにするような**伝え合う力**を育成したいと考える。

2 研究主題に迫るために

研究主題に迫るために、次のような仮説を設定し、研究を進めていく。

〈 授業の中で 〉

- ① 学習展開を工夫すれば、活動に興味・関心・意欲を持つことができ、伝え合う力が高められるだろう。(教師の学習計画の工夫・導入の工夫・発問の工夫・板書の工夫)
- ② 場の設定を工夫すれば、伝え合う力が高められるだろう。
(発表の場・交流の場)
- ③ ことばを大切にすれば、イメージを広げることができ、伝え合う力が高められるだろう。
(挿絵の活用・調べ学習)

〈 授業の中以外で 〉

- ④ 言語活動の充実をはかれば、言語能力を伸ばし、伝え合う力が高められるだろう。
(詩を読む時間・読書の時間・環境づくり・学校行事や特別活動)

3 研究の重点

(1) 「確かな学力」をつける授業研究の推進

- ・研究主題をうけ、各部会毎にテーマを設定し、研究を進めていく。
- ・重点単元を2つ決め、年計画を立てて取り組む。
- ・子どもたちが自分の思いや考えを深めていけるような授業を実践する。そのために、子どもの実態に合わせた支援や指導になっているか見直し、学習を展開していけるようにする。
- ・「話すこと・聞くこと」を明確にし、各部会での「めざす子どもの姿」に向けて系統立てた取組を行う。

(2) 読書指導の充実

読書は豊かな心を培ううえで大切な活動である。自然を愛する心、知的好奇心、想像力などは豊富な読書体験を積むことによって培われる。国語科の目標にも示されているとおり、国語科の学習の中で日常における読書活動の充実に結びつくような「読むこと」の授業の工夫が大切である。読み聞かせや読書発表会といった読書に関係深い言語活動とともに、情報活用能力の育成を意識した言語活動にも進んで取り組んでいきたい。

具体的な活動として、朝読書を実施し、全校読書週間を年2回実施する。学校図書館の利用の仕方を紹介し発展図書を充実させる。学校図書館ナビゲーションシステムを活用して図書委員会の活動を活性化させる。学級・図書室の図書を充実する。

(3) 他教科とのつながり

「ことばの力」を育てるためには、国語科だけでなく、学校全体の教育活動でとりくんでいかなければならない。たとえば、算数や理科、社会科などの学習では、根拠に基づいて説明する力をつけていたり、道徳や特別活動の時間で相手の立場にたって考え、それを文章に書いたりすることで育てることができる。生活科では様々な体験活動を通して、伝え合う力を育てることができる。また、図画工作科や音楽科では、作品の魅力を自分のことばで豊かに表現できるようにするなど、学校全体のすべての教育活動で子どもたちに「ことばの力」をつけいく

ことが必要である。そして、国語の力を育成していくことで、すべての学習や日常生活に、さらに役立ち、その力をつけていけるようにしたいと考える。

(4) 学習環境の見直しと充実

教育メディアをはじめ、教材・教具等の学習環境を見直し、さらに充実させていく必要がある。また、言語能力を育成していく時、子どもたちが常に豊かな文学作品にふれる場も大切にしていきたい。そこで、「詩の広場」を設置し、常に詩に触れる機会を大切にし、言語感覚を育成していこうと考える。

4 評価について

毎時間の学習において子どもにつけたい力（目標）を明確にし、その目標に到達しているかどうかを評価するだけでなく、到達していない子どもにその場で支援していくことが大切である。これらの取組を繰り返すことが指導のあり方を見直すことになり、指導と評価の一体化につながると思う。

さらに、学習指導案の本時の展開の中には、「おおむね満足できる」姿だけでなく、「十分満足できる」姿を具体的な子どもの姿として捉えておくこととする。

また、評価には、教師による評価だけではなく、子ども自身の自己評価と子供同士による相互評価もある。

自己評価では、自分を見つめることによって自分のよさに気づいたり、何を課題としたらよいのかなどをはっきりしたりすることができる。観点を明確にし、例えば伝え合う活動の中では、「誰に」「何を」伝えなかったのかに即して自己評価できるように工夫していきたい。

相互評価では、友達のよさに気づいたり、友達の話聞くことで今まで気がつかなかったことに気づくことができたりして、それを自分に取り入れ、互いに高め合おうとする態度を育てることができる。国語科の「伝え合う力」を育てていく際にも相手意識、目的意識の大切さを実感できる評価として大切にしていきたい。

このように、様々な評価をすることで、学習活動を振り返り、自分にどのような力が身についたか等をより客観的に知ることができ、確かな学力をつけることにつながっていくと考える。